

ベロットが複数の視点場から描いた「河川と街並みの景観」の構図的特徴

小川, 勇樹
愛知大学

松永, 一郎
福岡大学工学部

花崎, 正子
元東筑紫短期大学

趙, 世晨
九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門 : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/1809201>

出版情報 : 都市・建築学研究. 31, pp.1-9, 2017-01-15. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

ベロットが複数の視点場から描いた「河川と街並みの景観」の構図的特徴

The compositional characteristics of “River and Urban Landscape” painted by Bernardo Bellotto from different viewpoints

小川勇樹*¹, 松永一郎*², 花崎正子*³, 趙世晨*⁴, 萩島哲*⁵

Yuki OGAWA*¹, Ichiro MATSUNAGA*², Masako HANASAKI*³, Shichen ZHAO*⁴
 and Satoshi HAGISHIMA*⁵

This paper is a report on compositional characteristics of the rivers and urban landscapes painted by Bernardo Bellotto. As a method for this study, the author made a comparison between the paintings by Bellotto and the real views based on the field survey. The results of the analysis are as follows: 1) Bellotto painted the riverside views both from upstream side and from downstream side. 2) He chose viewpoint, either toward the opposite bank or toward the stream, depending on the width of the river. 3) The significant facilities and architectures in the areas, including the bridges with novel design, were painted multiple times from different viewpoints.

Keywords: Urban Landscape paintings, Bernardo Bellotto, River and Urban Landscape
 景観画、ベルナルド・ベロット、河川と街並みの景観

1 はじめに

1.1 背景と目的

イタリア人で18世紀ヴェネツィア派の景観画家、ベルナルド・ベロット(1722-1780)は、ヨーロッパの王侯貴族の宮廷画家として活躍した。描いた絵画は、アトリエで合作した等関連する絵画を含めると、1000点近く存在すると言われている¹⁾。

筆者らは、「絵になる景観」の観点からこのベルナルド・ベロットが描いた絵画の実景を求め、北イタリア(ヴェネツィア、トリノ、ヴェローナ等)、ドレスデン、ウィーン、ミュンヘン、ワルシャワなど、18世紀当時のヨーロッパの首都を、現地調査してきた。既に数編の論文・著作で調査結果の一端を報告してきた²⁾⁻⁷⁾。

本稿では、ベロットの絵画から「河川と街並みの景観」の作品を抽出し、その構図の特徴を明らかにすることを目的とする。

1.2 調査の方法

ベロットが描いた作品の中で、市販されている画集で入手可能な109点の作品を取り上げた。そして実景と絵画の比較調査、視点場の位置の確定調査、観察・写真撮影調査や定量データのための計測調査などを実施した。また、既存の地図資料の収集と、現地市役所の景観の担当職員へのヒアリング調査を実施した(表I)。

- * 1: 愛知大学
- * 2: 福岡大学工学部
- * 3: 元東筑紫短期大学
- * 4: 都市・建築学部
- * 5: 九州大学名誉教授

1.3 論文の構成

第2節では、ベロットが描いた絵画の構図の分類について既往の研究を引用して述べ、「河川と街並みの景観」が位置づけられることを確認した。第3節では、「河川と街並みの景観」に絞って絵画を抽出して、その特徴を述べ、さらに視対象までの距離などから、一連の組として位置づけられる絵画であることを明らかにした。第4節では、組として構成された理由などを考察した。

1.4 既往の研究

ベロットの作品については、筆者らと同様に、現地調査に基づく研究がある⁸⁾⁻¹¹⁾。また画面の大きさや制作年代、パトロンの所蔵品などの共通性を、関連した文献を調べて、対となる絵画を指摘した研究がある¹⁾⁸⁾。筆者らの研究は、これらの既往の研究の延長線にあるが、構図の類似性から、組として描かれた絵画を抽出したところに独自性がある。

表1 分析の絵画

国	都市(滞在年)	調査 絵画 数	河川 景観	組とし て描 いた
イタリア(33点)	ヴェネツィア(1738-47)	13	6	2
	ドーロ(1742)、パドヴァ(1742)	2	2	0
	フィレンツェ(1742, 1743)、ルッカ(1742)	7	5	4
	トリノ(1744)	2	1	0
	ヴェローナ(1745, 1746)	4	4	2
	ロンバルディア(ミラノ郊外)	5	3	3
ドイツ(ザクセン)(34点)	ドレスデン(1747-58, 1762-67)、ハイデナウ	18	5	3
	ビルナ(1753-56, 1762-67)	11	4	3
	ケーニヒシュタイン(1756-58)	5	0	0
オーストリア(15点)	ウィーン(1759-61)	15	0	0
ドイツ(バイエルン)(3点)	ミュンヘン(1761)	3	1	0
ポーランド(24点)	ワルシャワ(1767-80)	24	2	2
	計	109	33	19

2 ベロットが描いた絵画（109点）の構図的分類

2.1 絵画の分類

絵画1点ごとに建物、道路、緑、水などの景観構成要素を調べて、それを現地調査に基づき距離景別（近景、中景、遠景）にカテゴリ・データを作成した。そして数量化Ⅲ類分析を行い、カテゴリ・スコア、サンプル・スコアを導き、共通因子の解釈を行い絵画の分類を行った⁴⁾。

ミクロ的景観（市街地内の景観）は、通りと街並みの

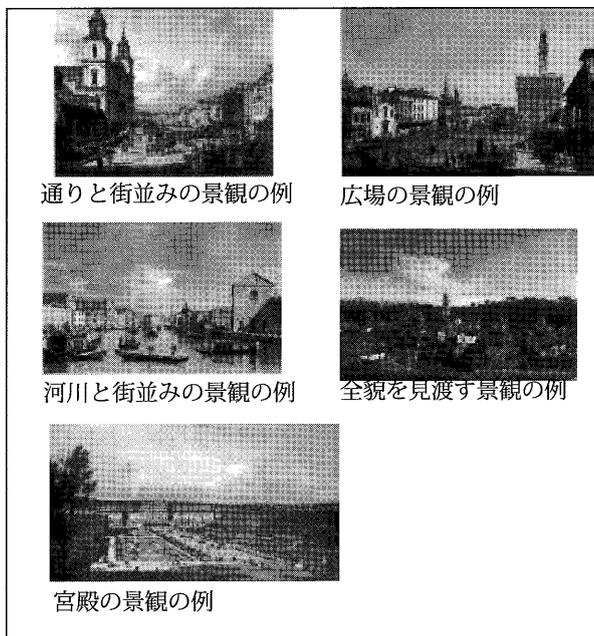


図1 5分類の景観グループ（事例）

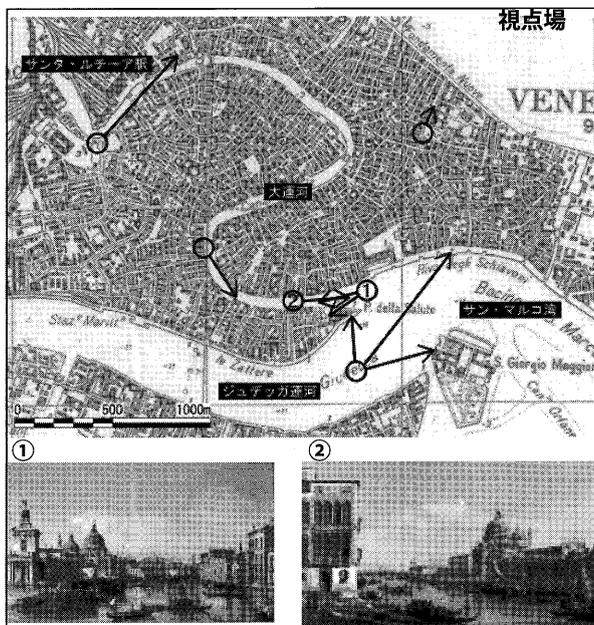


図2 ヴェネツィアの河川景観の視点場と構図
①「運河の入り口（62×98cm）」（1743）、②「サンタ・マリア・ギグリオから見る大運河（135.5×232.5cm）」（1743-44）。視点場地図の方位は上が北（以降同じ）

景観（単体建築物の景観を含み、道路沿いの街並みを描いた景観31点）、広場の景観（広場を囲む街並みを描いた景観13点）、河川と街並みの景観（河川と河川沿いの街並みを描いた景観33点）、の3グループに分類できた。マクロ的景観では、全貌を見渡す景観（市街地の全貌+農村の全貌、広々とした市街地の街並みを描いた景観12点）の1つにまとめられた。最後に、宮殿の景観（バロック風の庭園をもつ宮殿を描いた17点）の1グループがあり、合計で5つの景観グループに分類できた⁴⁾（図1）。

2.2 「河川と街並みの景観」の絵画

河川を画面中央部に配し、兩岸の街並みを見た景観であり、また河川を手前に配して対岸の街並みを見た景観である。33点の絵画が該当した。

この内訳は、ヴェネツィア時代（21点）、ドレスデン時代（9点）、ミュンヘン時代（1点）、ワルシャワ時代（2点）である。ヴェネツィア時代は、大運河、ブレンタ川、パドヴァ、それにフィレンツェ、トリノのポー川、ヴェローナが含まれる。ドレスデン時代は、ドレスデンとピルナのエルベ川、ミュンヘン時代ではイザール川、ワルシャワ時代ではヴィスワ川と対岸の街並である。

河川と街並みの景観は、ヴェネツィア時代の初期の作品に多い。

3 河川と街並みの景観を複数の視点場から描いた絵画

33点の「河川と街並みの景観」の絵画を検討する。視点場の位置と視線方向を調べると、同一の視対象を、「あちこち」¹⁰⁾から描いている。見る角度を変えて、同じ視対象を描いている。

これら「河川と街並みの景観」の絵画の視点場を1点1点確定し、どのような場所を視点場とし、どのような視対象を描いているのか、構図に注目しながら分析した。

3.1 ヴェネツィア時代

3.1.1 ヴェネツィア

ヴェネツィア（ドーロ、パドヴァ含む）の河川（運河）と街並みの景観は、8点である。そのうち相互に関連づけて描いたのは、次の「大運河の入り口」の2点だけである。まずこれを取り上げてみる。

①「大運河の入り口（65×86cm）」（1738 ミラノ・個人蔵）、②「サンタ・マリア・ギグリオから見る大運河（135.5×232.5cm）」（1743-44 ポールゲッティ美術館）の絵画（図2）である。

構図でみると、絵画①は、湾上に浮かぶ船舶を視点場として、大運河を画面中央に配して兩岸の街並みを見た。絵画②は、画面右下の手前（運河沿いに立地しているギグリオ邸）を視点場として、左手方向に運河が流れその先に両側の街並みを見た。運河上には多くの船舶が浮かぶ。

絵画①は画面中央手前から右手奥に向かっていく大運河の入り口であり、入り口からさらに先にアカデミアの塔を見た。

もう一方の絵画②は、大運河のすぐ近くにあるギグリオ邸から大運河入り口方向、先の絵画①の逆方向を見て、その先にサン・マルコ湾方向を見た。視点場分布図より流軸角は、15度で、両者とも流軸景である。河川(大運河)幅員は、70～200mである。

主な視対象は、大運河は別にして税関舎(絵画①の距離は125m、絵画②で距離340m)とサルデーテ教会(絵画①で200m、絵画②で200m)である。

この2点は、視点場からの視線が互いに入り口方向を向き、描いた視対象も同じサルデーテ教会、税関舎で、大きさも画題もおなじである。

つまりこの2点の絵画は、複数の視点場から同一の視対象「大運河の入り口」を描いたと判断できる。視点場は、運河沿い邸宅と湾上に浮かぶ船上である。ちなみに両視点場間の距離は約400mで、両者の絵画とも近景(～300m)の範囲内を描いたことがわかる。

3.1.2 フィレンツェ

フィレンツェでは河川と街並みの景観を、5点描いた。そのうち、関連づけて描いたのは、「カッライア橋」を描いた2点、「ヴェッキオ橋」を描いた2点、計4点である。他の1点は、組を構成していない。

まずは、「カッライア橋」を描いた2点を取り上げる。①「トリニタ橋からカッライア橋方向を見る(73.7×105.4cm)」(1742-43 フィッツウイリアム美術館・ケンブリッジ)と②「バーガロツギアからのアルノ川の景観(カッライア橋を見る)(50×75cm)」(1742 アイルランド美術館)の絵画(図3)である。

絵画①は、アルノ川の下流方向にカッライア橋(距離270m)を画面中央に見た。視点場はトリニタ橋のたもとである。すぐ手前にサン・スピリット教会(距離200m)、そして街並みの中にサン・フレディアーノ教会(ドームと共に)(距離520m)を見た。流軸角は25度、河川幅員は120mである。

一方、絵画②は、アルノ川の上流方向にカッライア橋(距離400m)を見た。視点場はバスプッチの道路上である。画面手前には、川底にあるサン・ロサの堰と水車、上流の対岸の街並みにはフレディアーノ教会(距離280m)、ほぼ中央の対岸にサン・スピリット教会(距離650m)を見た。流軸角は20度である。

絵画①はアルノ川の中央にカッライア橋を下流方向に見て、絵画②はその逆方向、上流方向を見た。主な視対象は「カッライア橋」で両者とも同じである。視点場は、アルノ川沿いの道路、橋のたもとである。流軸角20～25度で、流軸景である。両視点場間の距離は、約450m、両者の絵画とも近景(～300m)の範囲内を描

いたことがわかる。

もう一つの組について述べる。つまり③「ヴェッキオ橋方向を見る(73.3×105.7cm)」(1742-43 フィッツウイリアム美術館ケンブリッジ)と④「ヴェッキオ橋方向のアルノ川の景観(50×75cm)」(1742 アイルランド美術館)の絵画(図3)である。

絵画③は、アルノ川の上流方向を見て、画面中央に屋根つきのヴェッキオ橋(距離300m)を見た。視点場は、トリニタ橋のたもと、画面右手の端にフレスコバルディ邸(距離50m)、ヤン・ヤコポ・ソプラルノ教会の塔、そして連続している街並み(左岸方向)であり、画面左手にはアッチャイオーリ通り沿いの街並みを見た。アルノ川を中央に配した流軸景である。

一方、絵画④は、北西方向のアルノ川の下流方向を見た。視点場はグラツイエ橋上であり、アルノ川を中央に配した流軸景である。画面中央にはヴェッキオ橋(距離480m)、画面の右手の高い塔はヴェッキオ宮殿の塔(距離350m)、その右手前に家並みから突き出ているドゥオーモ(距離750m)、バディアの鐘楼などを見た。

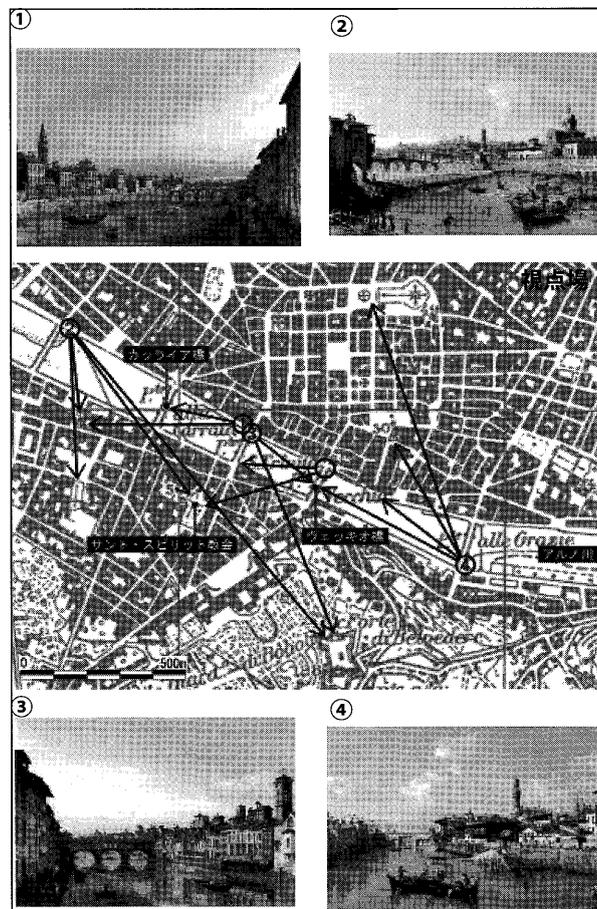


図3 フィレンツェの河川景観の視点場と構図

①「トリニタ橋からカッライア橋方向を見る(73.7×105.4cm)」(1742-43)、②「バーガロツギアからのアルノ川の景観(カッライア橋を見る)(50×75cm)」(1742) ③「ヴェッキオ橋方向を見る(73.3×105.7cm)」(1742-43)、④「ヴェッキオ橋方向のアルノ川の景観(50×75cm)」(1742)

以上2点の絵画は、アルノ川に架かる屋根つきの特異なデザインのヴェッキオ橋（絵画①距離300m、絵画②距離480m）を、上流方向からと下流方向から相互に見た。視点場は、2点とも橋のたもと（トリニタ橋とグラツイエ橋）である。

両視点場間の距離は約780mで、近景（～300m）から中景（～1km）の範囲内を描いた。

3.1.3 ヴァプリオ

ヴァプリオの河川と街並みの景観は3点である。この3点の視対象は、相互に関連づけられている。

つまり、①「アッダ川沿いに北西方向を見るヴァプリオとキャノニカ集落（47×71cm）」（1744 個人蔵）、②「アッダ川の南方向を見たヴァプリオとキャノニカの集落（47×71cm）」（1744 個人蔵）、③「北西方向を見たヴァプリオとキャノニカ（64.1×99.7cm）」（1744 ニューヨークメトロポリタン美術館蔵）の絵画（図4）である。

絵画①は、中央にアッダ川の上流を見て、左手には丘の上に建つ塔をもつビスコンティ邸を見た。視点場は、集落内の民家の2階のテラスである。糸杉に囲まれている

メルツィ・デリル邸から段々とくんだり、斜面になっていく庭園や屋敷林、その下には狭い幅のマルテサナ小運河が流れる。さらにその右手に、狭いズッド通りを見て、中央を流れるアッダ川、その右手には対岸のキャノニカ教区教会の鐘楼（距離450m）と集落を見た。

絵画②は、アッダ川に沿って小さな運河が設けられその堤防のズッド通り、さらに坂になって上った民家から、下流方向のアッダ川と両岸の集落を、俯瞰気味に見た。視点場は、坂の上にある修道院の塔である。前者の絵画①の逆方向を見た。画面左手側にキャノニカの教区教会（距離380m）とその集落、その屋敷林が見え、アッダ川沿いの集落側には導水路が小さく見える。画面右手側に糸杉に囲まれたメルツィ・デリル邸（距離400m）、そして小運河と堤防、そしてまた前者の視点場となった民家が確認できる。

絵画③は、アッダ川の上流方向を見た。視点場は、小運河沿いの遊歩道である。中央に見える塔は、ヴァプリオ集落にあるビスコンティ邸の塔であり、その下に見える建築物は、絵画①の視点場になっていた建築物である。右上上流の遠くに見える塔は、絵画②の視点場の塔で、これも民家の塔である。最右端の塔は、キャノニカ集落にある教区教会の鐘楼である。一方最左端にある塔は、ヴァプリオの教区教会の鐘楼である。絵画③は、前述の絵画①の構図の視点場をさらに南に移動して描いたもので、下流に寄った場所から上流方向を俯瞰的に見た。アッダ川の幅員は85mである。

これらの3点の絵画は、いずれも「アッダ川」を中央に見ており、それを中心にヴァプリオ側の小高い丘の集落、キャノニカ側の低い地盤の集落の空間構成を描いた。

構図としては、アッダ川の上流方向とその逆の下流方向を見て、キャノニカ教会（絵画①距離450m、絵画②距離380m、絵画③距離530m）を共に見ており、3つの視点場から見た「アッダ川」を描いた流軸景である。3点の絵画が1組となっている。

3.1.4 ヴェローナ

ヴェローナでは4点を描いており、いずれも、河川と街並みの景観である。そのうち2点が相互に関連づけられている。これを取り上げる。

①「ヴェローナ・スカリージェリ橋とヴェッキオ城（84.5×137.5cm）」（1745）と②「アディジェ川から見たスカリージェリ橋とヴェッキオ城のヴェローナの景観（73.7×154.3cm）」（1745-46 フィラデルフィア美術館）の絵画（図5）である。

絵画①は、アディジェ川の下流方向を見て、川に架かるスカリージェリ橋（距離210m）とヴェッキオ城を見た。視点場は、アディジェ川沿いの遊歩道である。斜めに架かっているこのアーチ状の橋脚を持つスカリージェリ橋は、それを支える脚柱と橋の手すり、そしてヴェッキオ

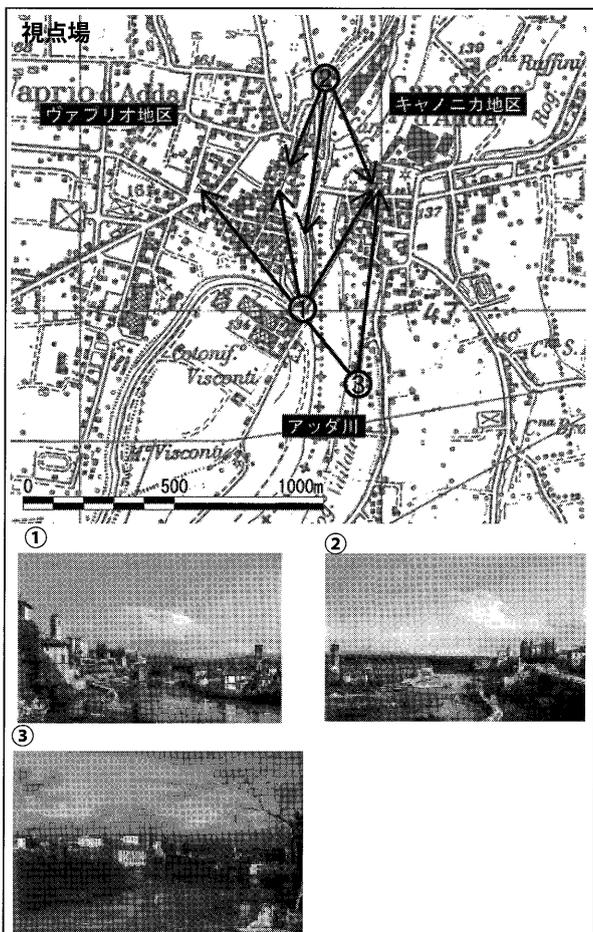


図4 ヴァプリオの河川景観の視点場と構図

①「アッダ川沿いに北西方向を見るヴァプリオとキャノニカ集落（47×71cm）」（1744）、②「アッダ川の南方向を見たヴァプリオとキャノニカの集落（47×71cm）」（1744）、③「北西方向を見たヴァプリオとキャノニカ（64.1×99.7cm）」（1744）

城の城壁の銃眼部分が、一体となってデザインされ、要塞の一部とみなされる特異な形状である。構図は、流れの方向を見たもので、流軸景であるが、橋梁を正面に見ているので、対岸景ともいえる。アディジェ川の幅員は、約120mである。

絵画②は、先の絵画の反対側から橋を見たもので、アディジェ川の上流方向を見た。視点場は、サン・ロレンツォ教会前の公園である。アディジェ川が湾曲していく方向の左手の手前城壁の上部に、サン・ロレンツォ教会とそれに続くスカリージェリ橋（距離330m）、そして、その上流方向を見た。橋の向こう、右端の木の陰に見えるサン・ゼノ教会、その左側はベルナルディン教会（距離850m）である。

以上の2点の絵画は、上流方向と下流方向の2方向からアディジェ川とスカリージェリ橋、ヴェッキオ城を見ており、橋までの距離（絵画①210m、絵画②330m）がほぼ同じである。両視点場間の距離は、600mである。

3.2 ドレスデン時代

3.2.1 ドレスデン

ドレスデンでは14点描いている。そのうち河川と街並みの景観は5点、そのうち3点を組みとして描いた。長い橋とそのデザイン、鐘楼のあるアルトシュタット（旧市街地）の街並みを描いた。

これらを取り上げる。つまり、①「アウグストゥス橋のエルベ川下流の右岸から見たドレスデン（133×237cm）」（1748 ドレスデン国立絵画館）、②「アウグストゥス橋のエルベ川上流の右岸から見たドレスデン（132×236cm）」（1747 ドレスデン国立絵画館）、③「新市街の橋頭堡から見たドレスデンの旧市街（99.5×134cm）」（1764

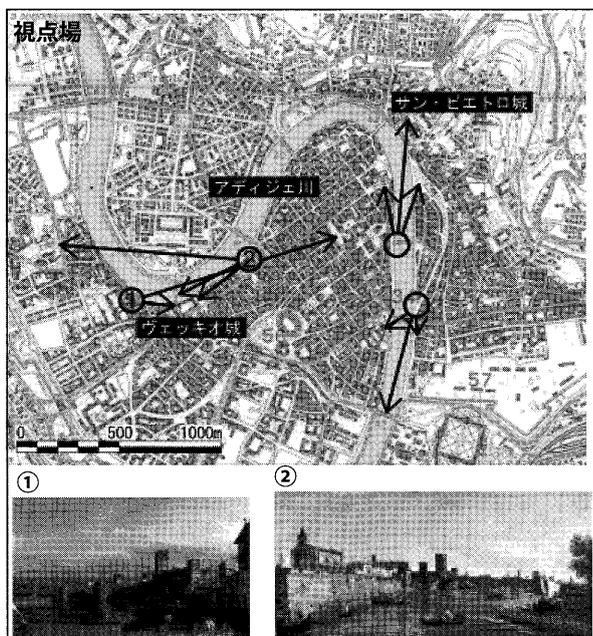


図5 ヴェローナの河川景観の視点場と構図

①「ヴェローナ・スカリージェリ橋とヴェッキオ城（84.5×137.5cm）」（1745）、②「アディジェ川から見たスカリージェリ橋とヴェッキオ城のヴェローナの景観（73.7×154.3cm）」（1745-46）

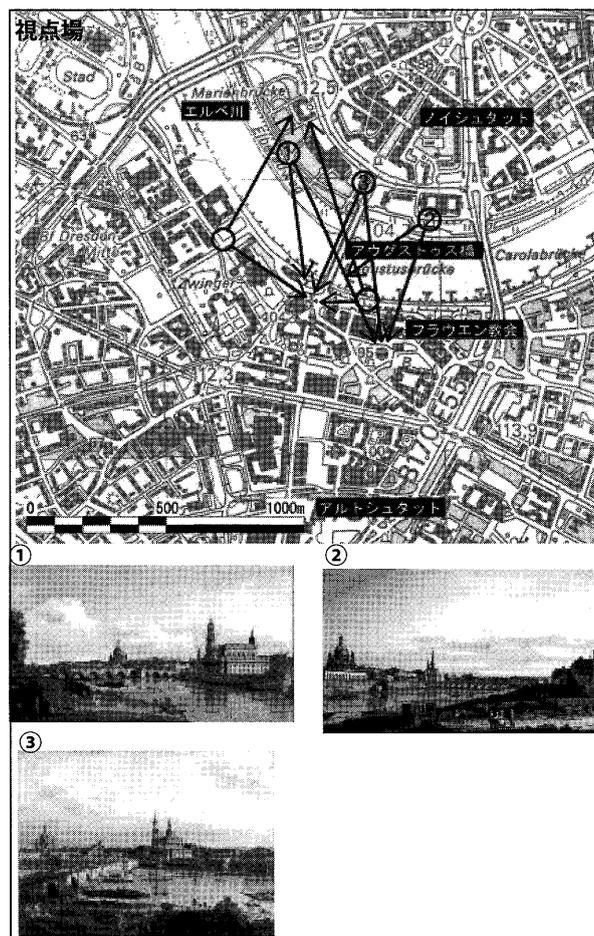


図6 ドレスデンの河川景観の視点場と構図

①「アウグストゥス橋のエルベ川下流の右岸から見たドレスデン（133×237cm）」（1748）、②「アウグストゥス橋のエルベ川上流の右岸から見たドレスデン（132×236cm）」（1747）、③「新市街の橋頭堡から見たドレスデンの旧市街（99.5×134cm）」（1764

236cm）」（1747 ドレスデン国立絵画館）、③「新市街の橋頭堡から見たドレスデンの旧市街（99.5×134cm）」（1764 カールスルーエ美術館）、の絵画（図6）である。

絵画①は、エルベ川とその河川敷を手前に見て、アウグストゥス橋（距離300m）を主景とした。視点場は、エルベ川沿いの河川敷公園である。中景では対岸に宮廷教会の塔（距離410m）、旧王宮のハウスマン塔（距離490m）、それにフラウエン教会（距離660m）など代表的な街並みを上流方向に見た。

絵画②では、エルベ川の下流方向を見た。視点場は河川敷公園である。アウグストゥス橋と対岸の街並みを、つまり先の絵画の反対側を見た。近景には、エルベ川に沿って建つブリュール宰相の邸宅の庭園の木製の塀・柵を見て、中景には、画面左手に対岸のフラウエン教会（距離480m）、アルベルティヌム博物館、宮廷教会（距離480m）などの街並みを見た。

絵画③の視点場は、ノイシュタット（新市街）側のアウグストゥス橋のたもとにあるブロックハウス（現ザクセン州芸術アカデミー）の上階である。ここから、対岸のアルトシュタットを俯瞰した。エルベ川に架かる石造

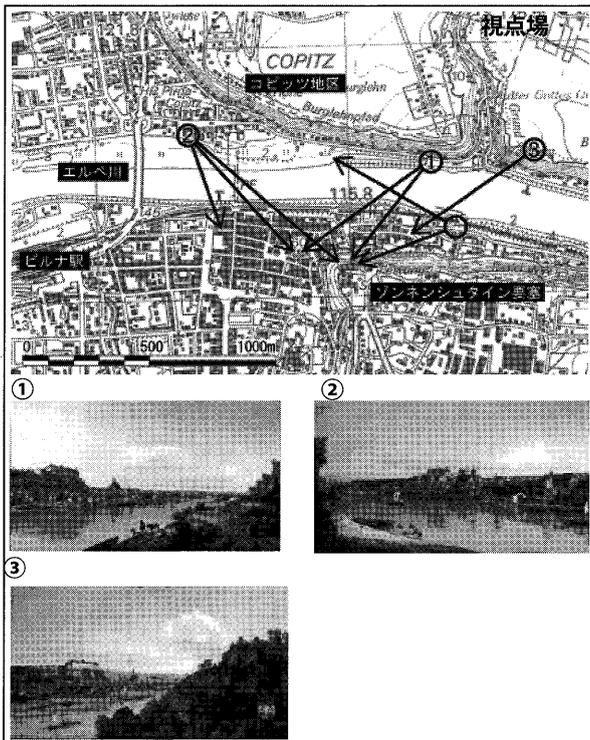


図7 ピルナの河川景観の視点場と構図

①「ポスタ地区の幹線道路と共にエルベ川右岸から見たピルナ (136 × 242 cm)」(1754-56)、②「コピッツ地区近くのエルベ川右岸から見たピルナ (135 × 242 cm)」(1754-56)、③「ポスタの高地から見たゾンネンシュタイン要塞とピルナ」(1754-56)

のアウグストゥス橋 (距離 150 ~ 380m)、それに連なる宮廷教会(距離 480m)とその鐘楼を中央に、左手にドーム形のフラウエン教会(600m)を見た。流軸角は 60 度で、エルベ川の幅員は 150 ~ 200m、対岸景である。

つまり、3 点の絵画ともアウグストゥス橋 (絵画① 距離 300m、絵画②距離 210m、絵画③距離 300m) をエルベ川と共に見て、宮廷教会 (絵画① 410m、絵画② 480m、絵画③ 600m)、フラウエン教会 (絵画① 660m、絵画② 480m、絵画③ 850m) を見た。

3.2.2 ピルナ

ピルナでは、河川と街並みの景観は 4 点である。そのうち 3 点が一組になっている。これを取り上げる。

つまり、①「ポスタ地区の幹線道路と共にエルベ川右岸から見たピルナ (136 × 242cm)」(1754-56 ドレスデン国立絵画館)、②「コピッツ地区近くのエルベ川右岸から見たピルナ (135 × 242cm)」(1754-56 ドレスデン国立絵画館)、③「ポスタの高地から見たゾンネンシュタイン要塞とピルナ (135 × 242cm)」(1753-54 ドレスデン国立絵画館)、の絵画 (図 7) である。

絵画①は、エルベ川沿いの下流方向に対岸のピルナの街を見た。視点場はエルベ川沿いの道路である。近景には、エルベ川下流方向、川沿いの道路と画面の右手の手前にポスタの集落を見た。中景には、対岸のピルナの船員の集落、その背後に左手の丘陵地の林の中のゾンネン

シュタイン要塞 (590m) を見上げ、その右手に聖母マリア教会の大屋根とその塔 (距離 730m)、それに市庁舎の塔、そして中央にはピルナの街並みを見た。流軸角は 40 度、エルベ川の幅員は、150m である。

一方、絵画②は、エルベ川上流方向に対岸の街並みを画面中央に、先の絵画の逆方向を見た。視点場は、エルベ川の河川敷である。画面右手から大屋根のドミニコ修道院 (距離 410m)、市庁舎の塔、聖母マリア教会の大屋根と塔 (距離 680m)、そして丘に建つゾンネンシュタイン要塞(距離 870m)を見た。街並みの屋根越しには、遠くに見える草原の地平線 (視点場から 1.4 ~ 2.4km の位置) を見た。流軸角は 40 度である。

絵画③は、ポスタの高地 (視点場) から、エルベ川の下流方向に対岸の要塞とピルナの街並みを俯瞰した。絵画①をその上部の視点場から俯瞰したものである。近景には、画面右側、すぐ手前のブルゲンの丘 (距離 200m) を配して、その向こうを流れるエルベ川を見た。中景には、対岸に見えるピルナの街並みがあり、画面左側のゾンネンシュタイン要塞 (距離 850m)、画面中央にはピルナの低い街並み、教会の切妻風の屋根と塔 (距離 950m) を見た。遠景には、ピルナの街並みの屋根越しに、草原の地平線 (距離約 28km) を見た。ピルナの集落の環境が分かる。

エルベ川流域、要塞、教会を 3 点ともに描き、対岸景である (45 度)。近景、中景、遠景の各距離景に応じて構成要素を配し、それが地平線を強め、雄大なスケール感を与えた。

3.3 ワルシャワ時代

ワルシャワの河川と街並みの景観は、2 点である。2 点あわせてワルシャワ市街の全貌をみたもので、ヴィスワ川の断面構成と街並みの全貌が理解できるようになっている。これを取り上げる。

①「プラガ地区側から見たワルシャワ市街の光景 (172.5 × 261cm)」(1770 ワルシャワ王城)と②「オルディナツキ宮殿と呼ばれた宮殿と共に見るワルシャワの光景 (171.5 × 259.5cm)」(1772 ワルシャワ王城) の絵画 (図 8) である。

絵画①は、ヴィスワ川の上流方向 (南西方向) の対岸のワルシャワの市街地の全貌を見た。手前はヴィスワ川の右岸の河川敷であり、そこが視点場となった。

近景には、画面すぐ手前、右岸のプラガ地区の小集落とヴィスワ川の水辺を見た。中景から遠景にかけては、ヴィスワ川の流れと共に、対岸に画面の右手の端から新市街地の聖母マリア教会 (距離 730m)、聖体修道女教会 (サクラメント教会) (距離 850m)、旧市街地の聖霊教会 (距離 1km)、イエズス会教会 (距離 950m) を見た。さらに王城 (距離 1.4km) を中心に聖ジョン大聖堂 (距離 1.3km) の切妻の大屋根、そして旧市街地の家並みを

見た。遠景には、画面の左手、対岸の1km以遠にある市街地のクラクフ郊外通りに建つ当時の主要な建物のスカイライン、聖十字架教会（距離2.2km）、オルディナツキ宮殿（距離2.6km）などを見た。

絵画②は、先の絵画の逆方向、ヴィスワ川の下流方向にワルシャワ市街地を見た。視点場は、河川敷きの集落地である。近景には、手前高台からヴィスワ川沿いまで斜面となり、その斜面上の漁師の集落を見た。高台に目を向けると、中景には擁壁の上に聳えるオルディナツキ宮殿（距離700m）が見え、聖十字架教会（距離1.1km）、ヤン・カジミエツシャ宮殿（距離930m）を見た。さらに遠景には、丘陵地上に見える王城（距離1.6km）、聖ジョン大聖堂（距離1.9km）等のワルシャワ市街地の街並みを見た。

ヴィスワ川の幅員は、約340mである。ヴィスワ川の対岸景30度として、まずはワルシャワ市街を北側から南方向（聖十字架教会）を見て（絵画①）、もう一方の絵画②では、ヴィスワ川を南から北東方向（王城）を見た。2つの視点場からワルシャワの街並みを描いたことが分かる。

それを合わせることによって上流方向、下流方向と、ヴィスワ川沿いに立地するワルシャワの連続する市街地の光景と河川断面の構成が理解でき、組として描いたと判断した。視点場は河川敷公園である。両視点場間の距離は、2.5kmである。

3.4 調査結果のまとめ

河川と街並みの景観の構図の特徴をまとめる。

①河川と街並みの景観は33点であるが、8つの組で19点を複数の視点場から描いた。河川景観では、組で描くことが多いことが分かった。

②一連の絵画を見ると、河川と街並みを上流方向から見て描き、また下流方向から見て描き、さらに俯瞰で見て描く、河川と共に街並みを空間的に理解できるように描いた。

③構図としては、対岸景（橋などを主景）、流軸景（河川を主景）であり、河川と街並みの環境に応じて描き分けた。従って長い橋を表現する場合には対岸景で描き、短い橋を表現する場合には流軸景で描いた。河川の幅員が狭い時（約100m程度以下）には流軸景で描き、広い時（約200m以上）には、対岸景で描いた。

④それらの視点場は、川に浮かぶ船舶、オープンスペースの河川敷公園、河川沿いの遊歩道、橋のたもとである。河川沿いには多くの視点場がある。

4 河川の街並み景観を組として描いた理由の考察

何故このような複数の視点場から河川と街並みの景観を描いたのであろうか。

1つには、視対象の川が長く、さらには河川が屈曲し、

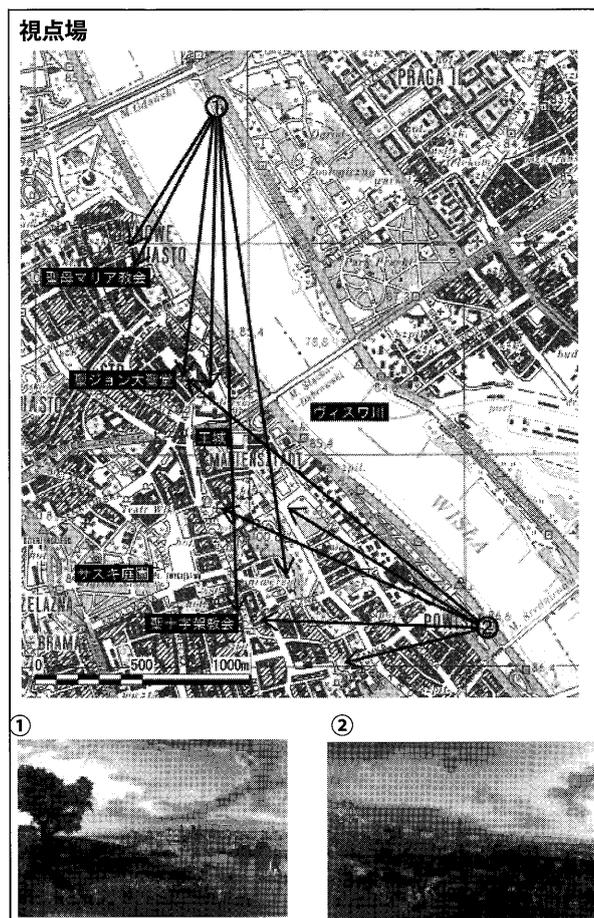


図8 ワルシャワの河川景観の視点場と構図

①「プラガ地区側から見たワルシャワ市街の光景（172.5×261cm）」（1770）、②「オルディナツキ宮殿と呼ばれた宮殿と共に見るワルシャワの光景（171.5×259.5cm）」（1772）

あるいは河川敷が広い空間に及ぶこともあって、河川の全体像を表現するためには、おそらく多様な角度から（複数の視点場）描く必要があった。

2つには、兩岸を結びつける橋梁のデザインや兩岸の岸壁の強固さを表現し、一方で添景として渡し船を描くなど兩岸を繋ぐ機能が要請された。

3つには、河川と街並みの景観は、河川と兩岸に見える街並みだけでなく、河川に船舶が浮かんで、河川での生活を表現しながら水視率を低めることが必要であった。添景を描きそれを達成した。

4.1 ヴェネツィアの大運河

ヴェネツィアにおける主要な施設を描いた。

1つは、税関舎のある大運河の入り口、2つは、記念碑としてのサルゥテ教会である。

大運河の入り口では、海外から入ってくる外国船等に課税する税関舎の建物があり、ヴェネツィア随一の交通量を誇る場所であった。運河上には、ゴンドラ、トラゲット、帆船、外海から入ってくる貨物船など数多くの船舶を見た。添景を描き、水視率を低めた。

背後に見えるサルゥテ教会のドームは、バロック建築の最高傑作として名高く、ペストが沈静化するようにと

いう誓願が成就したことを記念して、1630年に聖母に献堂された¹²⁾⁻¹⁴⁾。添景として、赤い服を身に付けた総督が礼拝後に船舶に向かう様子を描いた。視点場からの距離も約200mと同じ大きさで教会を描いた。

4.2 アルノ川 (フィレンツェ)

アルノ川に架かる橋梁のデザインに注目した。視点場は、橋のたもとである。

①アルノ川沿いの水辺から立ち上がる両岸壁で構成された街並みと、一方で河口堰を描き、河川と一体化したフィレンツェの街並みを描いた。川底から掬い取った砂・石材を、アルノ川の川底に馬車を乗り入れて運ぶ準備をしている様子など。アルノ川での生活も添景として描いた¹⁵⁾。

②アルノ川に架かる屋根つきのユニークな橋も1つの特徴として、ヴェッキオ橋 (ヴァザーリの廻廊 1565年)¹⁶⁾を詳細に描いた。

4.3 アッダ川 (ヴァプリオ)

3点の絵画を1つの組として、ヴィラとして有名なヴァプリオ集落とキャノニカ集落の間を流れるアッダ川の河川断面に注目した。視点場は、河川沿いに立地する集落内の民家や修道院である。

①溪流の趣のあるアッダ川の景観を表現した。アッダ川の主流沿いに接して流れる小運河、小運河沿いの狭いながらも人が通る道路である。アッダ川から立ち上る小高い丘ヴァプリオ集落、一方ではアッダ川沿いの低い地盤のキャノニカ集落、そして川沿いまで斜面を構成している庭園の複雑な断面を表現した。

②溪流を横断する渡し舟の工夫を表現した。中州で戯れる子供、河川での生活を添景として表現し水視率を低めた。

4.4 アディジェ川 (ヴェローナ)

組を構成した2点の絵画によって、アディジェ川に架かるスカリージェリ橋 (幅員5.2m) とヴェッキオ城が一体化したデザイン (1355年) に注目した¹⁷⁾。

4.5 エルベ川 (ドレスデン、ピルナ)

①ドレスデンのエルベ川に架かる長いアウグストゥス橋のその強固な石橋のデザイン (ポッペルマン設計 1723-1731 完成) を、下流方向、上流方向の両側から「鏡を見るように」⁸⁾ 市街地の街並みを描いた。河川、橋梁、教会の鐘楼の3点セットを捉えた河川景観の代表的な構図である¹⁸⁾。

②ピルナでは、エルベ川を前面に見ながら、手前の広い河川敷、そして対岸の市街地の美しい要塞や教会のシルエットを見た。その街並みを、上流方向と下流方向を見て、さらに対岸の街並みを俯瞰景として描いた。

③視点場は、河川敷公園、河川沿い遊歩道、河川を俯瞰できる小高い丘などである。河川敷での外国人との交流の様子³⁾などを添景として描いた。

4.6 ヴィスワ川 (ワルシャワ)

ヴィスワ川の川幅は広い。対岸の連続する市街地の街並みに注目した。視点場は、河川敷公園。見通しのきく、遮蔽物のない場所である。河岸段丘に面したワルシャワの市街地が、なだらかに河川沿いに傾斜していく河川敷を見た。2点の絵画によって、ワルシャワの対岸の市街地の全貌を描いた¹¹⁾。河川敷には、添景として貴族の舟遊び¹⁹⁾、それに漁村の集落が立地している様子を描いた。

4.7 組として描いた理由

まとめてみると、組として描いた理由は、1つには、大運河の入り口という施設の重要性和その賑わいが特筆すべきであったこと、2つには、橋梁の特異なデザインに着目して詳細に描いたこと、3つには、複雑な河川断面に注目したこと、4つには、水際から伸びていく水平線と対岸の垂直に伸びる街並みのシルエットに注目したこと、5つには、河川敷が視点場として機能し、かつ国際交流や生活・生産空間として機能していたことを描くことにあった。

5 結語

分析の結果を総括すると、以下の通りである。

河川と街並みの景観は、複数の視点場で描く場合が多く、上流側、下流側の両方から見る場合が多いことを述べた。ついで、河川と街並みの景観の構図としては、河川の幅員に応じて対岸景、流軸景で描きわけたことを述べた。

複数の視点場から描いた理由としては、①視対象としての主要な施設を強調したこと、②橋梁のデザインの斬新性の強調したこと、③起伏のある溪流の河川断面に注目したこと、④水際から伸びていく水平線と対岸の垂直に伸びる街並みのシルエットに注目したことがあげられる。

謝辞: 本論文は、科研 (基盤 (A)、19254003、代表: 萩島哲) の成果の一部である。

注及び参考文献

注1) 河川と街並みの景観の絵画リスト (組を構成しない絵画 14点のリスト)

1) 「ジュデッガ運河から見るサン・マルコ湾」(1740-41) ロンドン・個人蔵

ジュデッガ運河の出口からサン・マルコ湾方向を見た構図である。ジュデッガ運河では沢山の船舶が浮かんでいる。左手に税関舎、サン・マルコの塔、右手にマッジョレ教会が描かれている。しかしながら、サルテ教会は描かれていない。独立の絵画であると判断した。

2) 「サンタ・クロチェ教会と大運河 (59.7 × 92.1cm)」(1738/39) ロンドン・ナショナルギャラリー

- 3) 「サン・マルコ同信会館とメンディカンティ運河 (41.9 × 59.9cm)」 (1741) ヴェネツィア・アカデミア美術館
- 4) 「フォスカリ邸とモロリン邸の間から見る大運河」 (1739-40) ストックホルム国立博物館
- 5) 「ブレンタ川沿いのドーロの景観 (60.6 × 94.7cm)」 (1742-43) 個人蔵
- 6) 「パドヴァのカプリッチョ、中央の門と橋をもつ街 (48.5 × 73cm)」 (1745) Thyssen-Bornemisza
- 7) 「ヴェッキオ橋からアルノ川とトリニタ橋方向を見る (62 × 90cm)」 (1742) ブダペスト美術館
- 8) 「トリノ・ポー川の古橋 (127 × 174cm)」 (1745) トリノ・サバウダ美術館
- 9) 「ヴェローナ・ナヴィ橋 (132.5 × 233.5cm)」 (1746-48) ドレスデン国立絵画館
- 10) 「ヴェローナ・ヌオーヴォ橋からアディジェ川を見る (131 × 232cm)」 (1747-48) ドレスデン国立絵画館
- 11) 「エルベ川左岸から見たドレスデン、左手に宮殿、正面にカトリック宮廷教会 (133 × 235cm)」 (1748) ドレスデン国立絵画館
- 12) 「エルベ川下流の要塞近くの左岸から見たドレスデン (130.8 × 232.7cm)」 (1748) ドレスデン国立絵画館
- 13) 「船員の集落から見たピルナ (136 × 237 cm)」 (1753-56) ドレスデン国立絵画館
- 14) 「ハイデハイゼンの丘から見るミュンヘン市街 (69 × 119cm)」 (1762/67) ミュンヘン・レジデンツ

注2) 視点場のベースマップ

図 2 : CARTA D'ITALIA ALLA SCALA D1 1:25000, VENEZIA

図 3 : CARTA D'ITALIA ALLA SCALA D1 1:25000, FIRENZE

図 4 : CARTA D'ITALIA ALLA SCALA D1 1:25000, CASSANO D'ADDA

図 5 : CARTA D'ITALIA ALLA SCALA D1 1:25000, VERONA

図 6 : Topographische Karte, 1:10,000, 4948-SW, Dresden-Plauen, 4948-NW, Dresden, Landesvermessungsamt, Sachsen

図 7 : Topographische Karte 1:25000, 5049, Pirna, Landesvermessungsamt, Sachsen

図 8 : GLOWNY GEODETA KRAJU 263.34 WARSZAWA=POLNOC, 273.12 WARSZAWA-POLUDNIE, 1:25,000

参考文献

- 1) Stefan Kozakiewicz: Bernardo Bellotto, Volume I, II . Text, Verlag Aurel Bongers, Recklinghausen, Germany, 1972, Translation Paul Elek Ltd
- 2) 萩島哲：複眼の景観—ベルナルド・ベロット構図を

読む—、九大出版会、2014、

- 3) 萩島哲：バロック期の都市風景画を読む—ベロットが描いたドレスデン、ピルナ、ケーニヒシュタインの景観—、九州大学出版会、2006
- 4) 日高圭一郎、小川勇樹、趙世晨、花崎正子、萩島哲：ベルナルド・ベロットが描いた都市風景画の統計解析、都市・建築学研究、20、2011
- 5) 松永一郎、黒瀬重幸、花崎正子、趙世晨、萩島哲：ベロットが描いたウィーンとミュンヘンの風景画の構図と添景の解説、都市・建築学研究、2010
- 6) 花崎正子、趙世晨、内田晃、萩島哲：ベロットが描いた北イタリアの風景画の構図と添景の解説、都市・建築学研究、15、2009
- 7) 内田晃、有馬隆文、趙世晨、萩島哲：ベロットが描いたワルシャワの風景画の構図と市街地修復過程に関する一考察、都市・建築学研究、14、2008
- 8) Edgar Peters Bowron: Bernardo Bellotto and the Capitals of Europe, Electa Milano, 2001
- 9) Werner Schmidt: Bernardo Bellotto genannt Canaletto in Pirna, Canaletto Forum Pirna, 2000
- 10) Wilfried Seipel: Bernardo Bellotto genannt Canaletto, KHM, 2005
- 11) Andrzej Rottermund: The Royal Castle in Warsaw, Argraf, 2003
- 12) クリストファー・ヒバート、横山徳爾訳：ヴェネツィア (上) (下)、原書房、1997
- 13) クリスチャン・ベッグ、仙北谷茅戸訳：ヴェネツィア史、白水社、2000
- 14) 永井三明：ヴェネツィアの歴史—共和国の残照—、刀水書房、2004
- 15) R.B. ルイス：フィレンツェに抱かれて、中央公論社、1999
- 16) クリストファー・ヒバート、横山徳爾訳：フィレンツェ (上) (下)、原書房、1999
- 17) レンツォ・キヤレリ：ベローナー歴史と傑作の数々、BT、2004
- 18) Ideas for a new city centre, Dresden city planning office, 2005
- 19) ワルシャワ王宮、王宮出版センター、1995

(受理：平成28年11月10日)

